改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	【総評】中国学専攻入学者の漢文読解能力、あるいは英文学専攻入学者の英文による論文執筆能力向上のため、補習授業の実施や特別な科目（「研究方法論」）の開設が図られているが、その効果については検証が必要である。					
点検・評価問題点	中国学専攻入学者の漢文読解能力が以前に比べ低下していることに対して対策がなされていない。					
改善方策	3-146-1 大学院進学者に対して補習授業を実施し、試験を行うことでその効果を検証する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
中国学専攻は、補習授業を実施する方法論の検討に入る。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 各教員の指導に委ねているため、未着手である。
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
検討の結果を受けて、具体的な方法論を決定する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 各授業の中でどのように補修を行うかの検討を開始した。
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
具体的な方法論を実施する。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
試験などを通じて、その効果を検証する。		2014. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】中国学専攻入学者の漢文読解能力、あるいは英文学専攻入学者の英文による論文執筆能力向上のため、補習授業の実施や特別な科目（「研究方法論」）の開設が図られているが、その効果については検証が必要である。
点検・評価問題点	中国学専攻入学者の漢文読解能力が以前に比べ低下していることに対して対策がなされていない。
改善方策	3-146-1 大学院進学者に対して補習授業を実施し、試験を行うことでその効果を検証する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

<補習授業>を制度化するまでには至っていないが、大学院担当教員はその自覚をもって院生の指導に当たっている。

中国学専攻では、現在のところ補習授業を制度化したり、「研究方法論」を開設したりはしていない。

所見	来年度からの改善が進展することを期待する。
----	-----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

大学院進学者が減少している中で、補習授業を行い学生の負担を増やすことが必ずしも適切ではない。指導教授を中心に、学生のレベルに合わせた適切な指導を現行授業の中で行う方法の検討を始めた。

所見	学生の負担を考慮しながら、どのような補習が適切なのかを検討する必要があります。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

中国語の学力が必ずしも十分ではない大学院生を対象に、学部1年生対象の学科専門科目「中国語入門」に出席してもらうという形式で、大学院生に対する補習授業に当てた。

所見	中国語について補習の試みがなされたことは評価できます。今後漢文についても同様に補習の方法・実施を検討してください。
----	---

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	【総評】中国学専攻入学者の漢文読解能力、あるいは英文学専攻入学者の英文による論文執筆能力向上のため、補習授業の実施や特別な科目（「研究方法論」）の開設が図られているが、その効果については検証が必要である。					
点検・評価問題点	英文学専攻入学者の英文による論文執筆能力が以前に比べ低下していることに対して対策がなされていない。					
改善方策	3-146-2 すでに開設した「研究方法論」と連携して、各論文指導教員のもとで、さらに論の構成法、英文のチェックを詳細に受けることとし、それに加えて「研究方法論」の受講と個人指導の実際的な成果を提示するものとして、英文学専攻で年一度発刊する英文ジャーナル（Paulownia Review）に必ず査読を受けた英語論文を、修士論文に結びつく研究として発表させる。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
				→		
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
英語論文執筆能力の向上を目的とする講義科目「研究方法論」の開設。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 達成済。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
改善方策に示した具体的方法を実践し、検証する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 検証はアカデミックライティングの基準に照らし合わせながら行った。当該授業の受講と各教員の個人的指導により、少しずつではあるが 英語論文執筆能力の向上が見られ、修士論文においても好ましい方向に進んでいる。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
改善方策に示した具体的方法を実践し、検証する。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 昨年同様、検証はアカデミックライティングの基準に照らし行った。各授業において英文レポートを課す機会を増やし、指導教員と当該授業を通し指導を徹底するように心掛けた。各人段階的に差はあるものの明確な向上が見られた。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
改善方策に示した具体的方法を実践し、検証する。		2014. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】中国学専攻入学者の漢文読解能力、あるいは英文学専攻入学者の英文による論文執筆能力向上のため、補習授業の実施や特別な科目（「研究方法論」）の開設が図られているが、その効果については検証が必要である。
点検・評価問題点	英文学専攻入学者の英文による論文執筆能力が以前に比べ低下していることに対して対策がなされていない。
改善方策	3-146-2 すでに開設した「研究方法論」と連携して、各論文指導教員のもとで、さらに論の構成法、英文のチェックを詳細に受けることとし、それに加えて「研究方法論」の受講と個人指導の実際的な成果を提示するものとして、英文学専攻で年一度発刊する英文ジャーナル（Paulownia Review）に必ず査読を受けた英語論文を修士論文に結びつく研究として発表させる。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

2010年度文学研究科英文学専攻修士課程開設科目として、「研究方法論」通年4単位を新規に開設した。

所見

計画通り計画が実施されており、今後、検証体制を整えることを期待する。

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

「研究方法論」の講座と連携させつつ各指導教員による英語論文執筆の指導を徹底し、英文学専攻のジャーナルに3000語を基準とする英語論文を全員に発表させた。徐々ではあるが英語による論文執筆能力の向上が見られる。

所見

取り組み結果を検証し、その成果を明確にできるとよいと思います。

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

昨年度と同様、「研究方法論」の講座と並行しつつ各指導教員による英語論文執筆の指導を徹底させた。具体的には各授業において英文を書かせる機会を増やし、また英文学専攻のジャーナルに3000語を基準とする英語論文を全員に発表させた。特にジャーナルに寄稿する英語論文は最終的なネイティブチェックを受けクリアすることを必須としているが、それに対するの努力が見られる。

所見

具体的な取り組みがなされており、評価できます。具体的な成果が明確化されることを期待します。

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項						
点検・評価問題点	学部の教育から修士課程・博士課程前期課程の教育へ、そこから博士課程後期課程の教育へと連続性のある教育は人材育成の利点と考える。これらに鑑み、伝統的な教育内容を活かしつつ補講等を充実させる必要性がある。					
改善方策	3-147-1 学部の教育内容と大学院の教育内容の関連づけを推進する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
			→			
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
英文学専攻が行った合同セミナーを参考にし、日本文学専攻、中国学専攻は、学部と大学院との教育内容の関連付けの方法を検討する。		2011. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 協議を開始した段階にあり、一部着手している。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
日本文学専攻、中国学専攻、教育学専攻は、学部と大学院との教育内容の関連付けの具体案を検討する。		2012. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 前年度に引き続き協議を進めている。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
日本文学専攻、中国学専攻、教育学専攻は、学部と大学院との教育内容の関連付けの具体案を実施する。		2013. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 前年度に引き続き協議を進めている。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
日本文学専攻、中国学専攻、教育学専攻は、学部と大学院との教育内容の関連付けの具体案をさらに検討して実施する。			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	
点検・評価問題点	学部教育から修士課程・博士課程前期課程の教育へ、そこから博士課程後期課程の教育へと連続性のある教育は人材育成の利点と考える。これらに鑑み、伝統的な教育内容を活かしつつ補講等を充実させる必要性がある。
改善方策	3-147-1 学部教育内容と大学院教育内容の関連づけを推進する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻では、春秋の日本文学会において、学部生と院生の交流がある。院の通常の授業に、学部生を個別に参加させている教員もいる。専攻全体において、組織的にこのような取り組みを行ってはいないため、今後協議したい。

中国学専攻の一部のゼミでは、学部生と院生との合同研究会を継続的に開いているが、それがまだ全体に行き渡っていない。

教育学専攻では、専攻設置時に学部（学科）のカリキュラム体系に合わせて「思想・制度」「教授・学習」「認知・発達」の三分野を設定するなどの整合性をはかったが、学科が新カリに移行するにあたって、あらたな検討が必要になっている。

所見	日本文学・中国学専攻では、カリキュラムの見直しの検討をすることが望ましい。
----	---------------------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻では、春秋の日本文学会において、学部生と院生の交流がある。院の通常の授業に、学部生を個別に参加させている教員もいる。日本文学専攻の通常の授業を、学部生が受講できるカリキュラムを編成できることができるかどうか、さらに検討を続けたい。

中国学専攻では、ゼミ単位で学部生と大学院生合同の研究会を行っている。また「漢學會」において学部・大学院の枠を越えた研究会を行っている。これを教育内容に結びつける方法を協議する。

英文学専攻では、学部ゼミとの合同セミナー・合宿における相互学習の機会を設けている。また通常の学部ゼミへの院生の参加を行っているところも一部ある。

書道学専攻では、夏の学会において院生の発表を学部生が聞き、時には質問をすることもある。また年2回の大学院の特別講義には関心のある学部生が参加している。ただし教育内容の関連づけを推進するまでには至っていない。

教育学専攻では、学部の新カリの効果がまだ十分みえず、具体案まで至らず。また、教育学科からの進学者がごく少ないため検証がむずかしい。

所見	各専攻の教育方針にふさわしい学部・大学院の交流の方法をさらに検討していく必要があります。
----	--

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻では、春秋の日本文学会において、学部生と院生の交流がある。院の通常の授業に、学部生を個別に参加させている教員もいる。専攻としての組織的な取り組みはできていないのが現状である。今後、更に協議していきたい。

中国学専攻では、現状では昨年度と大きな変化はない。ゼミ単位で学部生と大学院生合同の研究会を行うと同時に、「漢學會」において学部・大学院の枠を越えた研究会を行っている。

英文学専攻では、学部ゼミとの合同セミナー、合宿における相互学習の機会、春秋の英文学会における交流、毎年11月に行っているシンポジウムと3月の外部講師を招いた連続特別講義（6～7回）などへの学部生の参加の機会を設けている。

書道学専攻では、夏の学会、大学院特別講義、夏合宿、卒業展などにおいて院生と学部生の交流が図られている。

教育学専攻では、学部の新カリの効果がまだ十分みえず、具体案まで至らず。また、教育学科からの進学者が少ないため検証がむずかしい。なお、留学生には通常の学部ゼミへの参加を奨励しているところもあり、学部と大学院での教育を意識的に繋げようという試みが見られる。

所見	学部と大学院の連続性について各専攻で試みがなされていることは評価できます。今後その取り組みがどのような成果を上げているか、検証できるとよいでしょう。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項						
点検・評価問題点	本学以外の大学から入学してきた学生には、本学卒業生が普通に持ち合わせる学問的知識が欠如ないし不足する者がいる。また、留学生については日本語能力・論文作成能力に問題がある。					
改善方策	3-147-2 他大学からの入学生は、補講を行う。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
			→			
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
日本文学専攻、中国学専攻は、他大学からの入学生に対する補講などの学力向上のための方法を検討する。		2011. 3. 31	☒ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 他大学からの入学者がいないため、具体的な方策を検討することができなかった。
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
日本文学専攻、中国学専攻は、他大学からの入学生に対する補講などの学力向上のための具体案を実施する。		2012. 3. 31	☒ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 専攻ごとに方策を検討している。
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
他大学からの入学生に対しては、日本文学専攻、中国学専攻は、引き続き補講などの学力向上のための具体的な対応策を検討し、実施する。 留学生に対しては、文学研究科の全専攻が入学試験の際に、留学生の日本語能力を知る方策として、参考資料として日本語能力試験ないしは日本留学試験のスコアを提出させることを実施する。			☒ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	完全に達成 (B または C の理由)
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
			☒ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☒ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☒ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	
点検・評価問題点	本学以外の大学から入学してきた学生には、本学卒業生が普通に持ち合わせる学問的知識が欠如ないし不足する者がいる。また、留学生については日本語能力・論文作成能力に問題がある。
改善方策	3-147-2 他大学からの入学生は、補講を行う。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻と書道学専攻は、各教員の指導に委ねているのが現状である。今後、留学生の語学指導などはT.A.などにも協力してもらい、専攻全体で取り組みを考えたい。

中国学専攻は、ここ数年、他大学からの入学生ゼロ状態が続いているので対策を立てることができない。

所見	来年度からの改善が進捗することを期待する。
----	-----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、各教員の指導に委ねているのが現状である。今後、留学生の語学指導などはT.A.などにも協力してもらい、専攻全体で取り組みを考えたい。2011年度は、他大学からの入学生に対して、専攻全体での補講を行うことはできなかった。

中国学専攻では、今年度も他大学からの入学生はいなかったため、具体的な対策を立てることができない。

英文学専攻は留学生においてこの件に関し、今のところ大きな問題は見られない。

書道学専攻では、今のところ他大学からの入学生に特に問題はないが、留学生については日本語能力や論文作成能力に問題があるため、他研究科や他専攻とも協議して方策を考えたい。

所見	来年度以降、さらに改善方策が進展することを期待します。
----	-----------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、2012年度は、他大学からの入学生はいなかったため、具体的な対策を立てることはなかった。留学生は、3月31日現在、前期課程に1人、後期課程に1人が在籍している。2人とも日本語能力には優れていて、論文作成能力にも特に問題は無い。

中国学専攻では、他大学からの入学生に対して、学部1年生対象の「中国語入門」の授業に出席するように指導し、これによって補講に代えた。中国語の学力に向上が見られた。留学生については過去7年の内で、平成18年度に博士課程後期課程に1名(台湾)の入学があったが、それ以降、現在に至るまで留学生はいない。日本語のみならず、中国古典を日本語を通して学習するという、本専攻の性質上、諸外国の留学生には学習面での負担がやや重いということも避けられないと思われる。

昨年度と同様、英文学専攻は留学生においてこの件に関し、今のところ大きな問題は見られない。

書道学専攻では、今のところ他大学からの入学生に特に問題はない。留学生については日本語能力や論文作成能力に問題があり、各教員やT.A.の努力による所が大である。今後他研究科や他専攻とも協議しながら方策を考えたい。

教育学専攻では他大学からの入学生はいないが、留学生については日本語能力や論文作成能力、さらには教育学や心理学に関する基礎的な知識が充分ではないものも見受けられるので、こうした院生をどのようにフォローするのかについて検討しているところである。例えば学部の概論を履修させる、あるいは学部のゼミに参加を促すなどが検討されている。

所見	各専攻ごとに方策がなされており、評価できます。
----	-------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	【総評】中国学専攻は専攻を特徴づける教育システム・プロセスとして哲学・史学・文学の3分野の兼修を掲げているが、各分野の履修に制限がなく、特色を発揮するには不十分。					
点検・評価問題点	最近の5年間、修士・博士ともにほぼ毎年、学位取得者がでている。このことから博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスはおおむね適切と言える。					
改善方策	3-148 本研究科または当該専攻を特徴づける教育システム・プロセスを採用する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
	→					
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
哲学・史学・文学を幅広く修得させる本学の伝統的中国学教育を推進できるような教育システム・プロセスを検討する。		2011. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 一部着手している。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
検討の結果を受けて、具体的な教育システム・プロセス法を採用する。		2012. 3. 31	○	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 完全に達成			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】中国学専攻は専攻を特徴づける教育システム・プロセスとして哲学・史学・文学の3分野の兼修を掲げているが、各分野の履修に制限がなく、特色を発揮するには不十分。
点検・評価問題点	最近の5年間、修士・博士ともにほぼ毎年、学位取得者がでている。このことから博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスはおおむね適切と言える。
改善方策	3-148 本研究科または当該専攻を特徴づける教育システム・プロセスを採用する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

中国学専攻の修士は勿論、博士学位の取得者は毎年出ているが、今後この状態が恒常的に続くかどうか保証はない。事柄は、教育システムの問題だけでなく、進学者の<資>の低下というより深刻な問題も絡んでいる。

前期課程において、哲学、史学、文学の3分野から最低4単位を必ず兼修するよう、『文学研究科シラバス』に記載するよう検討中。

所見	特徴ある教育システムを採用するために、カリキュラムを見直す必要があるのではないかと。
----	--

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

中国学専攻前期課程において、来年度の科目編成表より哲学・文学・史学の3分野から最低1科目以上履修することを義務づける文言を追加することにした。

完全に達成

所見	学生が実際に指示通りに履修しているかどうか検証してください。
----	--------------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

所見	
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項						
点検・評価問題点	「現職教員1年修了コース」は開設したばかりで実績がないが、今後は入学が予想され、文学研究科への社会人受け入れの一つの窓口として期待できる。					
改善方策	3-151-1「現職教員1年修了コース」を対外的にアピールし、中国学専攻以外でもこのコースの設置を目指す。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
				→		
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
		2011. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
		(B または C の理由) 各専攻ごとに取り組みが行われている。				
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
		2012. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
		(B または C の理由) 専攻ごとに取り組みが行われている。				
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
中国学専攻、教育学専攻は、「現職教員1年修了コース」を対外的にアピールする方法を具体化する。中国学専攻、教育学専攻を除く各専攻は、1年修了コース開設案を具体化する。		2013. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
		(B または C の理由) 「現職教員1年修了コース」のニーズについて議論したが、結論に至っていない。【中国学専攻】				
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
中国学専攻、教育学専攻および今年度開設した日本文学専攻は、「現職教員1年修了コース」を対外的にアピールする方法を決定する。		2014. 3. 31	A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
		(B または C の理由)				
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
		(B または C の理由)				
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
		(B または C の理由)				

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	
点検・評価問題点	「現職教員 1 年修了コース」は開設したばかりで実績がないが、今後は入学が予想され、文学研究科への社会人受け入れの一つの窓口として期待できる。
改善方策	3-151-1「現職教員 1 年修了コース」を対外的にアピールし、中国学専攻以外でもこのコースの設置を目指す。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

中国学専攻は、すでに開設済みであるが、問題は現時点で応募者が皆無という事実である。本専攻に魅力がないのか、教育現場に問題があるのか、分析が必要である。

日本文学専攻と書道学専攻は、次年度から本格的な検討にはいり、再来年度には完全実施の予定である。

英文学専攻は、社会人の受け入れの件も含めて今後前向きに検討すべく、委員会を設置した。

教育学専攻も、すでに開講済みであるが該当者がなかった。首都圏を中心に卒業生や教育委員会への働きかけを散発的にやってきているが、これをより組織的に展開する必要がある。

所見	「現職教員 1 年修了コース」が現職教員にとってニーズのあるものなのかも分析が必要。
----	--

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻では、「現職教員一年修了コース」の開設を目指し、本年度、案内パンフレットと内規案を作成した。現在、来年度から実施する方向で事務手続きを進めている。

中国学専攻では本学においていち早く「現職教員一年修了コース」を設置した。しかしいまだ入学者はいない。専攻の教員でこの問題を認識し、来年度以降具体的な検討に取り組む。

英文学専攻は設置した委員会と専攻委員会において検討を行ってきたが、英文学専攻コースでの需要がなかなか難しいと思われる点がありまだ結論を見ていない。他大学院の専攻状況などを今後調査し検討資料とする。

書道学専攻では、専攻会議において必要性の有無を含めて検討した。

教育学専攻においては卒業生に知らせる努力をはじめ。卒業生とも連絡が増すため学科 40 年行事を利用する予定。

所見	来年度以降、改善方策がさらに進展することを期待します。「現職教員 1 年修了コース」のニーズについても調査が必要だと思われます。
----	--

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、「現職教員一年修了コース」の開設に必要な事務手続きを全て終え、2013 度から実施できることとなった。

中国学専攻では、「現職教員 1 年修了コース」のニーズについて議論をし、専攻の教員で入学者がいまだにいないという問題点を認識した。しかし議論の結果、結論には至らなかった。

英文学専攻は設置した委員会を中心にこの一年間検討してきたが、結論としてこのコースの設置を取りやめることにした。教職のスキルアップを求める現職教員が英文学専攻を希望することは高く望めないし、現行のカリキュラム、スタッフもそれに対応するだけの余力を持っていない。

書道学専攻では、他専攻の状況等を鑑みて「現職教員一年修了コース」を早急には開設しないこととした。

教育学専攻においては現職教員として活躍している卒業生に知らせる努力をはじめると同時に、昨年度から再開された教員免許更新の講習時にパンフレットなどを配布し、現職教員にアピールする予定である。

所見	「現職教員一年修了コース」を設置している専攻において、さらに議論を深めて、具体的な方策を実施されることを期待します。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項						
点検・評価問題点	外国人留学生については日本語能力や論文作成能力に問題がある。					
改善方策	3-151-2 外国人留学生の、日本語基礎教育の充実を図る。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
書道学専攻など留学生が多い専攻を中心に、日本語教育部門との連携を検討する。	2011. 3. 31	A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
		(B または C の理由) 未着手である。				
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
文学研究科外国語科目に「日本語（留学生用）」などの科目の開設又は外国語学専攻日本語文化学専攻に新たに設置された日本語論文作成のための講座に乗り入れることを検討する。	2012. 3. 31	A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
		(B または C の理由) 外国語学専攻日本語文化学専攻の日本語論文作成のための講座について検討を開始した。				
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
検討の結果を受けて、外国人留学生の日本語基礎教育を実施する。	2013. 3. 31	A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
		(B または C の理由) 外国語学専攻日本語文化学専攻の日本語論文作成のための講座への乗り入れについて検討したが、まだ実施に至っていない。				
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
外国語学専攻日本語文化学専攻の日本語論文作成のための講座への乗り入れについて検討し、外国人留学生の日本語基礎教育を実施する。		A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
		(B または C の理由)				
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
		A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
		(B または C の理由)				
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
		A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
		(B または C の理由)				

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	
点検・評価問題点	外国人留学生については日本語能力や論文作成能力に問題がある。
改善方策	3-151-2 外国人留学生の、日本語基礎教育の充実を図る。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

外国人留学生の論文作成は書道学専攻でも大きな問題とされる。外国語学研究科日本語文化学専攻では、新たに日本語論文作成のための講座が出来たので、これに乗り入れることも検討する。

所見	国際交流センター開設科目との連携も考えられないか。
----	---------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、各教員の指導に委ねているのが現状である。

書道学専攻では、留学生の日本語能力・論文作成能力に問題が多く、外国語学研究科日本語文化学専攻の日本語論文作成のための講座に乗り入れを図ることが可能か否かについて検討を開始した。

所見	国際交流センターの開設科目との連携も模索してください。また入学試験時に留学生の日本語能力をはかることも必要だと思われます。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、各教員の指導に委ねているのが現状である。

中国学専攻では、この数年にわたって留学生は入学していない。

英文学専攻は特に問題はない。日本語能力は会話に限っては問題ない。レポートなどは英語で対応できるし、論文作成能力に関しても英語での論文作成なので問題はない。

書道学専攻では、留学生の日本語能力・論文作成能力の向上のため、外国語学研究科日本語文化学専攻の日本語論文作成のための講座等により乗り入れを図ることを検討しているが、他専攻とも方策を協議していきたい。

教育学専攻は、各教員の努力により対応してきたが、組織的な対応策を構築する必要性を痛感しており、何らかの対策を取るべく検討を開始した。

所見	来年度以降、さらに検討を進めて実施計画が進展することを期待します。
----	-----------------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	【総評】教育効果を測定するための具体的方法が整備されていない。					
点検・評価問題点	客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための方法は現在ない。					
改善方策	3-152 客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを開発し活用する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
教育学専攻を中心に、客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを検討する。		2011. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由) 未着手である。学部と違って学生数が少ないため、授業評価アンケートなどの量的測定はできないが、それに替わる方法をあみ出せていない。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
教育学専攻を中心に、客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを開発する。		2012. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由) 未着手である。学部と違って学生数が少ないため、授業評価アンケートなどの量的測定はできないが、それに替わる方法をあみ出せていない。先行事例がなかなかみつからない。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
文学研究科として、客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを検討する。		2013. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由) 未着手である。学部と違って学生数が少ないため、授業評価アンケートなどの量的測定はできないが、それに替わる方法をあみ出せていない。先行事例がなかなかみつからない。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
文学研究科として、客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを開発する。		2014. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
検討・開発の結果を受けて、教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを決定する。		2015. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
決定を受けて、実現に向けて連携・調整を図る。		2016. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】教育効果を測定するための具体的方法が整備されていない。
点検・評価問題点	客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための方法は現在ない。
改善方策	3-152 客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組みを開発し活用する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

一専攻、一研究科単位では検討できない実情にある。

大学院にふさわしい「効果測定」の客観的方法のアイデアがまだない。他大学の実態や経験を調査するなど、基礎的なところから着手したい。

所見	来年度からの改善が進捗することを期待する。全研究科においてガイドラインの作成など検討が必要と思われる。
----	---

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

未着手である。

人文社会系で客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組み・方法があるのかどうか調査を始めたい。但し、全研究科としての検討が必要と思われる。

所見	来年度からの改善が進展することを期待します。
----	------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

未着手である。

人文社会系で客観的に教育・研究指導上の効果を測定するための仕組み・方法があるのかどうか調査を始めたい。但し、全研究科としての検討が必要と思われる。

所見	来年度も引き続き改善方策が進展することを期待します。
----	----------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項						
点検・評価問題点	人文科学系の大学教員定数が減少している厳しい状況が続くことが懸念される。					
改善方策	3-153 研究能力を修得し、大学専任教員を目指すためのきめ細かな教育・指導のできる体制を構築する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
			→			
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
後期課程を持つ専攻の一つ、中国学専攻から、大学専任教員を目指す院生ためのきめ細かな教育・指導のできる体制の構築に向けて検討する。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 検討中である。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
ひきつづき後期課程を持つ各専攻で、大学専任教員を目指す院生ためのきめ細かな教育・指導のできる体制の構築に向けて検討する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 専攻ごとに具体的に検討を開始した。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
検討結果を受けて、実現可能な体制を構築する。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 完全に達成			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	
点検・評価問題点	人文科学系の大学教員定数が減少している厳しい状況が続くことが懸念される。
改善方策	3-153 研究能力を修得し、大学専任教員を目指すためのきめ細かな教育・指導のできる体制を構築する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

博士課程後期課程を設置している、日本文学専攻、中国学専攻、書道学専攻を中心に考える。

日本文学専攻は、大学教員を目指すような学生が毎年入学して来るかどうか不明であり、また専任のポストに就くためには相当な年数と本人の努力が求められるのが現状である。教員側の体制は整っていると見てよい。

中国学専攻は、現状では進学者の資の低下、数の減少という厳しい状態が続いているが、本専攻ではそれでも学位論文の完成にまで何とか育てていっている。しかし、学位を取得しても研究職に就けないという、むしろ<外>に大きな問題がある。

書道学専攻は、他大学を参考にしてカリキュラム以外に対策を考える。

所見	博士の学位を取得しても就職口がないのは事実であり、一大学ではどうしようもない。専任教員になれるかどうかだけでなく、大学の専任教員としてふさわしい人材の育成という観点からの大学院教育体制を検討していくとよいのではないかと。
----	--

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、大学教員を目指すような学生が毎年入学して来るかどうか不明であり、また専任のポストに就くためには相当な年数と本人の努力が求められるのが現状である。教員側の体制は整っていると見てよい。

就職口がないのは中国学専攻一専攻では対策の立てようがない。大学教員にふさわしい人材の育成のために、たとえば学部の授業で「教育実習」のようなことを行うなど、具体的な方法の検討を始めた。

書道学専攻では、大学の専任教員としてふさわしい人材の育成という観点から、博士論文の質の向上のための方策を検討している。まずは今年度から博士論文のための発表会を2度に増やした。

所見	研究能力の養成のみならず、「教育者」を養成するという観点からも学生を指導していくこともよいのではないだろうか。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、教員側の体制は整っていると見てよい。大学の専任教員としてふさわしい人材の育成という観点からの指導は、個々の教員が院生に対して行っているが、専攻全体としての方策は立てられなかった。

中国学専攻では、後期課程に在籍する大学院生に、教育実習のようなことを行った。学部1年生対象の「中国語入門」の授業において、周到な準備の上実際に授業をしてもらい、授業後問題点を協議した。

書道学専攻では、院生を教育補助員に採用し前期課程の院生や学部生への指導の補助に当たらせている。また、博士号取得者を非常勤講師として教壇に立たせている。

文学研究科全体としては、大学院生に教育補助員として学部生の学習の補助をする制度が確立している。また後期課程の大学院生の中で特に優秀な学生を非常勤講師として採用し、学部の授業を担当させている。

所見	博士後期課程を擁する専攻において、それぞれ取り組みがなされたことを評価します。
----	---

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	<p>【総評】シラバスは全般的に教員間で記載に精粗があり、特に文学研究科、外国語学研究科において、成績評価基準が具体的でないなどの、精粗が見受けられるので、改善が望まれる。</p> <p>【助言】全般に教員間でシラバスの記載に精粗があり、特に文学部、外国語学部、法学部、経営学部、環境創造学部、スポーツ・健康科学部、文学研究科、外国語学研究科において、成績評価基準が不明確なものなども散見されるので、改善が望まれる。</p>					
点検・評価問題点	科目担当教員が一人で行う講義科目・演習科目の成績評価において採点者の個人差が出やすい。					
改善方策	3-154 シラバスに詳細な評価基準を明記し、統一的な成績評価基準を作成する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
				→		
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
教育学専攻を中心に、シラバスに詳細な評価基準を明記し、統一的な成績評価基準を作成するための検討を行う。		2011. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由) 未着手である。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
引き続き教育学専攻を中心に、シラバスに詳細な評価基準を明記し、統一的な成績評価基準を作成するための検討を行う。		2012. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 全学で取り組み始めている。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
文学研究科として、シラバスに詳細な評価基準を明記し、統一的な成績評価基準を作成するための検討を行う。		2013. 3. 31	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 全学の基準に基づいて電子シラバスに記入したが、記載の精粗に対する検証体制はまだ整っていない。なお、成績の評価基準は全学の基準に基づいている。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
文学研究科として、シラバス記載の精粗に対する検証体制を整える。		2014. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】シラバスは全般的に教員間で記載に精粗があり、特に文学研究科、外国語学研究科において、成績評価基準が具体的でないなどの、精粗が見受けられるので、改善が望まれる。</p> <p>【助言】全般に教員間でシラバスの記載に精粗があり、特に文学部、外国語学部、法学部、経営学部、環境創造学部、スポーツ・健康科学部、文学研究科、外国語学研究科において、成績評価基準が不明確なものなども散見されるので、改善が望まれる。</p>
点検・評価問題点	科目担当教員が一人で行う講義科目・演習科目の成績評価において採点者の個人差が出やすい。
改善方策	3-154 シラバスに詳細な評価基準を明記し、統一的な成績評価基準を作成する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

一専攻、一研究科単位では検討できない実情にある。

所見	研究科長会議などしかるべき会議で提案する。
----	-----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

シラバスに関しては、学長より、シラバス記載の統一基準として、「2012年度シラバス記載例」が全学的に示され、これに基づいて記入することが要請されている。シラバス記入例を提示し、記載内容に精粗がないよう各教員に修正をまかせている

所見	全学的取り組みの中で改善方策が実施されていることは評価できます。記載内容に精粗がないよう検証することも必要だと思われます。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

全学の基準に基づいて電子シラバスに記入したが、記載の精粗に対する検証体制はまだ整っていない。なお、成績の評価基準は全学の基準に基づいている。

所見	チェック体制を確立させることが必要だと思われます。
----	---------------------------

改善方策実施計画書

担当部局： 文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2011年6月17日

認証評価指摘事項	<p>【総評】中国学専攻博士課程前期課程の現職教員1年修了コースと教育学専攻修士課程を除いて、研究指導がカリキュラム上に位置づけられていないので、改善が望まれる。(助言)</p> <p>【助言】文学研究科博士課程前期課程では、中国学専攻の現職教員1年修了コースと教育学専攻修士課程を除いて、研究指導をカリキュラム上に位置づけていないので、改善が望まれる。</p>					
点検・評価問題点	中国学専攻博士課程前期課程の現職教員1年修了コースと教育学専攻修士課程を除いて、研究指導がカリキュラム上に位置づけられていない。					
改善方策	3-155-1 (新規) 各専攻のカリキュラム上に、研究指導を位置づけるカリキュラムを制定する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
未着手。		2011. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成	
			(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
教育学を除く各専攻は、専攻ごとのカリキュラム上に研究指導を位置づけるための審議を開始する。		2012. 3. 31	A 完全に達成	○ B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由) 専攻ごとに検討を開始した。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
教育学を除く各専攻は、専攻ごとのカリキュラム上に研究指導を位置づけるカリキュラムを立案する。		2013. 3. 31	○ A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由) 「演習」などの授業で実際に研究指導を行ってきたが、それがシラバスなどに記載されていなかったため、研究指導を行っている授業を担当している各教員に、その旨をシラバスに明記するように要請し、記入を実施してもらった。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
教育学を除く各専攻は、専攻ごとのカリキュラム上に研究指導を位置づけるカリキュラムを制定する。		2014. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】中国学専攻博士課程前期課程の現職教員1年修了コースと教育学専攻修士課程を除いて、研究指導がカリキュラム上に位置づけられていないので、改善が望まれる。(助言)</p> <p>【助言】文学研究科博士課程前期課程では、中国学専攻の現職教員1年修了コースと教育学専攻修士課程を除いて、研究指導をカリキュラム上に位置づけていないので、改善が望まれる。</p>
点検・評価問題点	中国学専攻博士課程前期課程の現職教員1年修了コースと教育学専攻修士課程を除いて、研究指導がカリキュラム上に位置づけられていない。
改善方策	3-155-1 (新規) 各専攻のカリキュラム上に、研究指導を位置づけるカリキュラムを制定する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

2010年度までの科目編成表上では、中国学専攻博士課程前期課程「現職教員一年修了コース」の「中国学課題演習」と、教育学専攻修士課程の「教育学研究指導Ⅰ・Ⅱ」が開設されているほかは、研究指導科目が明確に示されていない。今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識し、2011年1月の文学研究科委員会において、『2011年度文学研究科シラバス』各専攻「科目編成表」に研究指導科目を◎で明記した案が承認され、ホームページにも掲載された。しかしこれは最低限度の対応であり、真に研究指導をカリキュラム上に位置付けたものではないので、カリキュラムを改正し、立案、制定する必要がある。

英文学専攻では英語論文執筆能力向上と同時に、研究方法の指導を行う「研究方法論」を開設した。この講座と連携を深めながら、修士論文指導を受ける学生は必ず履修することになっている指導教員担当の演習科目(一)(二)において研究指導をさらに徹底したものにす。

所見

改善方策がさらに進展することを期待する。

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、カリキュラム改正についての検討を、まだ進めていない。

中国学専攻では、年1回の「院生発表会」を開催し専攻教員全員で院生の論文指導を行っている。また各演習科目の中で研究指導を行っている。そもそも演習は研究指導科目なので、今後シラバスに論文指導を明記することを検討する。

英文学専攻は、開設された「研究方法論」の講座と各指導教員担当の演習科目(一)(二)を連携させ、カリキュラム上それらを研究指導科目と位置づけている。さらに、秋のシンポジウムでのプレゼンテーションと英文ジャーナル Paulowmia Review への論文発表のそれぞれにおける指導を通し、一貫した研究指導を行っている。

書道学専攻では、カリキュラム上に研究指導を位置づけるカリキュラムを立案した。

所見

来年度以降、改善方策がさらに進展することを期待します。

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

「演習」などの授業で実際に研究指導を行ってきたが、それがシラバスなどに記載されていなかったため、研究指導を行っている授業を担当している各教員に、その旨をシラバスに明記するように要請し、記入を実施してもらった。

所見

取り組みがなされたことを評価します。

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	<p>【総評】FDについて、研究科により取り組みの程度に差があり、教育指導方法の改善のための組織的な取り組みが不十分であり、改善が望まれる。</p> <p>【助言】経済学部、外国語学部、法学部、国際関係学部、スポーツ・健康科学部、文学研究科、経済学研究科、法学研究科、外国語学研究科では、教育・研究指導の改善のためのFDの組織的な取り組みが不十分であるので、改善が望まれる。</p>						
点検・評価問題点	FD委員会に研究科選出の委員を送り出すことが決定した段階である。						
改善方策	3-156 FD活動の実施。						
計画	前期		中期		後期		
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	
		→					
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果				
文学研究科の全ての専攻で、FD活動を実施するための検討を行う。		2011.3.31	☐ A完全に達成	☐ B達成半ば	☐ C未達成	(BまたはCの理由) 未着手である。 インフォーマルなかたちでの指導経験の交流をでていない。	
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果				
ひきつづき文学研究科の全ての専攻で、FD活動を実施するための検討を行う。		2012.3.31	☐ A完全に達成	☐ B達成半ば	☐ C未達成	(BまたはCの理由) 教育学専攻では、FD委員会は設置した。活動は着手しつつある。	
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果				
来年度に向けて委員会の設置を検討する。		2013.3.31	☐ A完全に達成	☐ B達成半ば	☐ C未達成	(BまたはCの理由) 委員会を設置することは文学研究科委員会で承認された。	
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果				
来年度に向けて委員会を設置して、活動を開始する。			☐ A完全に達成	☐ B達成半ば	☐ C未達成	(BまたはCの理由)	
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果				
			☐ A完全に達成	☐ B達成半ば	☐ C未達成	(BまたはCの理由)	
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果				
			☐ A完全に達成	☐ B達成半ば	☐ C未達成	(BまたはCの理由)	

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】FDについて、研究科により取り組みの程度に差があり、教育指導方法の改善のための組織的な取り組みが不十分であり、改善が望まれる。</p> <p>【助言】経済学部、外国語学部、法学部、国際関係学部、スポーツ・健康科学部、文学研究科、経済学研究科、法学研究科、外国語学研究科では、教育・研究指導の改善のためのFDの組織的な取り組みが不十分であるので、改善が望まれる。</p>
点検・評価問題点	FD委員会に研究科選出の委員を送り出すことが決定した段階である。
改善方策	3-156 FD活動の実施。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

大学院の全研究科として取り組むべきで、一研究科としては対応できない実情にある。
教育学専攻では、インフォーマルな形で留学生に対する指導方法やオムニバス科目内での教員間の情報交換や学び合いはみられるが、それを組織化する必要あり。

所見	来年度からの改善が進捗することを期待する。
----	-----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻では、FD委員会は設けていない。
中国学専攻では、FD活動については着手していない。
英文学専攻では、まだ具体的な活動には着手していない。
書道学専攻では、院生に対する指導に関して普段から教員間の情報交換を行っているが、組織を作るまでには至っていない。
教育学専攻では、3名のFD委員を決め、2011年度はFD委員会を開催。外国人留学生の教育・指導についてレポート（レジュメ）を土台に8名の参加者で意見交流、討論を行った。

所見	来年度以降、改善方策がさらに進展することを期待します。
----	-----------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

委員会を設置することは文学研究科委員会で承認された。
日本文学専攻では、FD委員会は設けていない。2013年度にFD委員会を設ける予定である。
中国学専攻では、文・哲・史の三領域を有していて、相互の専門性が深化していることにより、共通の枠組みによってそれぞれの領域の教育研究活動の独自性を制約することが、かえって懸念されるため、専攻領域内部でのFD活動を推進する段階に現状はあるに止まる。
英文学専攻では、指導方法などの改善案などについて各教員からの報告という形でミーティングを持った。
書道学専攻では、具体的なFD活動にはまだ着手していない。
教育学専攻では、2008年度の設定以来、毎年、院生の研究発表会にあわせてFDを開催しており、2013年2月14日にFD委員会を開催した。特に今回は外国人留学生の受入れと指導のあり方、日本語能力の向上について活発な意見交換と方法についての議論が交わされた。

所見	研究科として、また各専攻ごとにふさわしいFD活動のあり方を議論されることを期待します。
----	---

改善方策実施計画書

担当部局： 文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2011年6月17日

認証評価指摘事項	【総評】履修指導の組織化が見られず、論文作成における教育・研究指導も指導教員に任されており組織的な体制が明確でなく、FDも組織的に行われていないので、改善が望まれる。(下線部についての計画)					
点検・評価問題点	学生に対する論文作成における教育・研究指導が指導教員個人に任されている状況であり、入学時・進学時における履修指導が組織的に行われているとは言い難い。					
改善方策	3-156-1 (新規) 専攻ごとに組織的な、入学時・進学時における履修指導を組織的に実施するプログラム (案)、ならびに教育・研究指導の年間スケジュール (案) を作成し、実施する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
未着手。				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
専攻ごとに組織的な、入学時・進学時における履修指導を組織的に実施するプログラム (案)、ならびに教育・研究指導の年間スケジュール (案) を作成する。			2012. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 専攻ごとに検討を開始した。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
専攻ごとに組織的な、入学時・進学時における履修指導プログラム、ならびに教育・研究指導の年間スケジュールを実施する。			2013. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 専攻ごとに引き続き検討している。		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
専攻ごとに組織的な、入学時・進学時における履修指導プログラム、ならびに教育・研究指導の年間スケジュールを実施する。				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】履修指導の組織化が見られず、論文作成における教育・研究指導も指導教員に任されており組織的な体制が明確でなく、FDも組織的に行われていないので、改善が望まれる。
点検・評価問題点	学生に対する論文作成における教育・研究指導が指導教員個人に任されている状況であり、入学時・進学時における履修指導が組織的に行われているとは言い難い。
改善方策	3-156-1 (新規) 専攻ごとに組織的な、入学時・進学時における履修指導を組織的に実施するプログラム (案)、ならびに教育・研究指導の年間スケジュール (案) を作成し、実施する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

すでに専攻ごとにガイダンス時のみならず年間を通して継続的な履修指導が行われて来ている。ただし組織的な取り組みは不十分である。また教育・研究指導も指導教員個人に任せられ、組織的な指導体制は必ずしも十全ではない。今回の認証評価の指摘で問題点を認識し、組織的な体制を構築するためにも、年間を通じた履修指導プログラム (案)、ならびに教育・研究指導スケジュール (案) を作成する必要がある。それらを『大学院の手引』『入試要項』『大学院案内』および『大学院文学研究科シラバス』などの冊子体に公表する必要がある。なお当然ながらこれはカリキュラムと連動する内容を含んでいる。

所見	3-155-1 とも関連するので、合わせて改善方策を進展させてください。
----	--------------------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学専攻は、「年間を通じた履修プログラム (案)」、および「教育・研究指導スケジュール (案)」の作成については、いまだ検討段階にある。

中国学専攻では、ゼミ単位では教育・研究指導の年間スケジュールを作成している。

英文学専攻は入学時に、新入生と2年生を全員集め、履修上の指導や年間スケジュールの確認を行った。履修、各教員の担当科目、授業方法、夏の合同セミナー、秋のシンポジウム、ジャーナルへの論文執筆などの具体的スケジュール内容を上級生からのアドヴァイスも交え行った。

書道学専攻では、組織的な履修指導を入学時に行っている。また現在全教員参加による修士論文や博士論文の中間発表会や博士論文最終発表会等を実施している。さらに教育・研究指導の年間スケジュール (案) を作成し、学生に周知することを検討している。

所見	年間スケジュールのみならず、入学 (進学) から学位取得までを視野に入れた指導スケジュールの作成を検討する必要があると思われます。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

専攻ごとに引き続き検討している。

日本文学専攻は、2012年度は議論が進まず、いまだ検討段階にある。

中国学専攻では、入学・進学時に専攻として説明会を行っている。またゼミ単位では教育・研究指導の年間スケジュールを作成している。一専攻内であっても分野が異なると、教育・研究指導の方法も異なることもあり、専攻で統一することは必ずしも容易ではない。

英文学専攻は入学時にオリエンテーションを行った。科目編成表と時間割、専攻で作成した年間の活動スケジュールを配布し、履修方法・各科目の説明・授業方法、秋のシンポジウム、ジャーナルの論文執筆、特別講義の対応など、2年生にも参加してもらって確認を行った。

書道学専攻では、組織的な履修指導を入学時に行い、その際に今年度より教育・研究指導の年間スケジュールを配布している。

教育学専攻では修士論文執筆者の研究発表会と併せて大学院FD担当委員会を中心に、毎年FD研究会を開催している。そこで論文作成指導の方法や内容などについて意見交換をし、改善・向上を目指している。

所見	各専攻および研究科で議論を深め、方策が実施されることを期待します。
----	-----------------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	<p>【総評】文学部、国際関係学部、環境創造学部、外国語学研究所、法務研究所以外では、国際交流が活発とはいえないので、改善が望まれる。</p> <p>【助言】全学において、国際交流の目標を定め、各学部、各研究所においても到達目標として国際交流の推進を掲げているが、経済学部、外国語学部、法学部、経営学部、スポーツ・健康科学部、文学研究科、経済学研究所、法学研究所、アジア地域研究所、経営学研究所では、留学生の派遣、受け入れ実績および国際シンポジウムなどの開催状況も含め、国際交流が活発とはいえないので、改善が望まれる。</p>					
点検・評価問題点	<p>学生を積極的に海外留学に送り出すこと、及び教員が海外の大学・研究機関と活発に交流することは当然のことであるが、海外との交流に当てられる予算は減少傾向にあるという現実に直面している。</p>					
改善方策	<p>3-157-1 奨学金給付留学生枠を現状維持し、学生の海外留学を推進する。</p>					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
		→				
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
文学研究科2名の奨学金給付留学生枠を現状維持し、学生の海外留学を推進するための検討を行う。		2011.3.31	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	C 未達成
			(BまたはCの理由) 現状維持である。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
検討結果を受けて、原案を作成し、研究科委員長会議に諮る。		2012.3.31	☐	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
			(BまたはCの理由) 留学生枠の増加を提案した。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
			A 完全に達成	☐	B 達成半ば	C 未達成
			(BまたはCの理由)			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
			A 完全に達成	☐	B 達成半ば	C 未達成
			(BまたはCの理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			A 完全に達成	☐	B 達成半ば	C 未達成
			(BまたはCの理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成	☐	B 達成半ば	C 未達成
			(BまたはCの理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】文学部、国際関係学部、環境創造学部、外国語学研究科、法務研究科以外では、国際交流が活発とはいえないので、改善が望まれる。</p> <p>【助言】全学において、国際交流の目標を定め、各学部、各研究科においても到達目標として国際交流の推進を掲げているが、経済学部、外国語学部、法学部、経営学部、スポーツ・健康科学部、文学研究科、経済学研究科、法学研究科、アジア地域研究科、経営学研究科では、留学生の派遣、受け入れ実績および国際シンポジウムなどの開催状況も含め、国際交流が活発とはいえないので、改善が望まれる。</p>
点検・評価問題点	学生を積極的に海外留学に送り出すこと、及び教員が海外の大学・研究機関と活発に交流することは当然のことであるが、海外との交流に当てられる予算は減少傾向にあるという現実直面している。
改善方策	3-157-1 奨学金給付留学生枠を現状維持し、学生の海外留学を推進する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科2名枠は現状維持である。海外留学の推進については未着手である。

日本文学専攻では、日本文学・日本語学という専門領域において、海外の大学・研究機関との交流をいかに進めるかは大きな課題である。今後、検討していくことになる。各教員個人においては、交流はあるものの、組織立って行われてはいない。十数年前までは、韓国・中国の特定の大学との定期的な教員交流があった。

中国学専攻では、この枠を最大限に活用し、毎年のように留学生を中国に派遣している。

英文学専攻では、毎年イギリス、アメリカを中心として海外に留学生を積極的に送り出している。

書道学専攻では、北京の首都師範大学に数年に一名の留学生を送っている。

教育学専攻では、分野の特質からも留学希望者はほとんどみられない。学生への情報提供は今後も続けていく。

所見	国費留学など外部の制度の活用も視野に入れる。
----	------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科として2名枠プラス1名の増員を大学院評議会に提案したが、現状維持となり全体枠9名の弾力的運用に留まった。

日本文学専攻では、日本文学・日本語学という専門領域において、海外の大学・研究機関との交流をいかに進めるかは大きな課題である。各教員個人においては、交流はあるものの、組織立って行われてはいない。まずは、広報活動に力を入れ、学生が留学を希望しやすくなる環境作りを目指したい。

中国学専攻では、大学による派遣枠の他、中国政府奨学金留学生の制度を利用して、毎年留学生を派遣している。

英文学専攻では、今年度はイギリス2名、アメリカ1名の留学生を送り出すことができた。次年度もイギリスに1名の留学生を送ることになっている。今後も推進をする。

書道学専攻では、北京の首都師範大学に数年に一名の留学生を送る一方で、海外からの留学生も受け入れている。また、特別講義に中国からの講師を頻繁にお願いしている。さらに台湾芸術大学とは交流展も行っている。

教育学専攻では、分野の特質からも留学希望者はほとんどみられない。学生への情報提供は今後も続けていく。

2011年度における留学生の派遣数は中国学専攻1名(中国)、英文学専攻3名(アメリカ1、イギリス2)の計4名で、外国人留学生の入学者数は日本文学専攻1名(インド)、英文学専攻2名(中国1、バングラディッシュ1)、書道学専攻3名(中国2、台湾1)、教育学専攻6名(中国)の計10名であった。

所見	留学生の派遣については活発に行われています。今後も引き続き多くの学生を派遣できるよう、体制を整えるとよいと思われます。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

2012年度に達成済み

所見	
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	【総評】到達目標である「教育研究交流を現在のレベルより質的・量的ともに拡大する」ための具体策が示されていないので、早期に検討、実現されることが望まれる。					
点検・評価問題点	学生を積極的に海外留学に送り出すこと、及び教員が海外の大学・研究機関と活発に交流することは当然のことであるが、海外との交流に当てられる予算は減少傾向にあるという現実直面している。					
改善方策	3-157-2 専攻を超えた教育研究交流の拡大。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
			→			
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
文学研究科共同研究実施委員会が発足し、「第1回文学研究科共同研究会」を実施した。その実績を踏まえ、専攻を超えた教育研究交流の拡大を検討する。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 実施し検討に入った。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
前年度につき「第2回文学研究科共同研究会」を開催するとともに、ひきつぎ専攻を超えた教育研究交流の拡大の具体案を検討する。さらに学外(国外)との交流についても具体案を検討する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 学外との交流についての具体案の検討は未着手である。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
前年度につき「第3回文学研究科共同研究会」を開催するとともに、ひきつぎ専攻を超えた教育研究交流の拡大の具体案を決定する。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
前年度につき「第4回文学研究科共同研究会」を開催するとともに、ひきつぎ専攻を超えた教育研究交流の拡大の具体案を決定する。さらに学外(国外)との交流についても具体案を検討する。			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】到達目標である「教育研究交流を現在のレベルより質的・量的ともに拡大する」ための具体策が示されていないので、早期に検討、実現されることが望まれる。
点検・評価問題点	学生を積極的に海外留学に送り出すこと、及び教員が海外の大学・研究機関と活発に交流することは当然のことであるが、海外との交流に当てられる予算は減少傾向にあるという現実と直面している。
改善方策	3-157-2 専攻を超えた教育研究交流の拡大。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科5専攻共同の「第1回文学研究科共同研究会」を2010年6月19日に実施した。その後共同研究実施委員会を中心に、第2回目のテーマについて検討を数回行った。

所見	計画通り計画が実施されており、今後、国内外も含めて一層の教育研究交流を期待する。
----	--

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科5専攻共同の「第2回文学研究科共同研究会」を2011年10月22日に実施した。その後文学研究科として次年度以降も継続して共同研究会を開催することを決定した。
但し、学外（国外）との交流についての具体案の検討は未着手である。

所見	研究科内の研究交流は計画通り実施されており、評価できます。研究科として海外との交流の方法をさらに模索してください。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科5専攻共同の「第3回文学研究科共同研究会」を2012年10月20日に実施した。その後文学研究科として次年度以降も継続して共同研究会を開催することを決定した。

所見	研究科内での研究交流は継続して行われており、今後も継続されることを期待します。海外研究機関との交流について、引き続き方策を協議してください。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	【総評】海外交流予算が減少しつつあるという現実にも直面している。					
点検・評価問題点	学生を積極的に海外留学に送り出すこと、及び教員が海外の大学・研究機関と活発に交流することは当然のことであるが、海外との交流に当てられる予算は減少傾向にあるという現実に直面している。					
改善方策	3-157-3 外部資金獲得により国際交流を行う。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
					→	
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
文学研究科共同研究実施委員会主催「第1回文学研究科共同研究会」の実績を踏まえて、外部資金の獲得を模索するとともに、国際交流のあり方を検討する。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 未着手である。
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
外部資金を獲得するため、文部科学省、学術振興会などの研究費補助金、財団の各種の補助金等に申請しながら、国際交流の在り方を検討する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 未着手である。
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
ひきつぎ外部資金を獲得するための補助金等に申請しながら、国際交流の在り方を検討する。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 外部資金を獲得するための補助金等の申請は行っていないが、国際交流の在り方については検討した。
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
ひきつぎ外部資金を獲得するための補助金等に申請しながら、国際交流については海外の研究施設と共同シンポジウムを実施する。		2014. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
5年間を総括し、文学研究科としての国際交流の在り方についての提言を行う。		2015. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】 海外交流予算が減少しつつあるという現実にも直面している。
点検・評価問題点	学生を積極的に海外留学に送り出すこと、及び教員が海外の大学・研究機関と活発に交流することは当然のことであるが、海外との交流に当てられる予算は減少傾向にあるという現実にも直面している。
改善方策	3-157-3 外部資金獲得により国際交流を行う。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

外部資金獲得のための具体策は講じられていない。

所見	来年度からの改善が進捗することを期待する。
----	-----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

一研究科一専攻としての外部資金獲得のための検討は未着手である。

所見	来年度以降、さらに改善が進展することを期待します。
----	---------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

外部資金を獲得するための補助金等の申請は行っていないが、国際シンポジウムの実施などの国際交流の在り方については検討した。

所見	来年度以降も引き続き協議を進め、改善方策が進展することを期待します。
----	------------------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項	<p>【総評】具体的な学位授与方針ならびに学位論文審査基準が学生に明示されていないので、『大学院の手引』などに明示することが望まれる。</p> <p>【助言】法務研究科以外の全研究科において、学位授与方針ならびに学位論文審査基準が学生に明示されていないので、『大学院の手引』などに明示することが望まれる。</p>					
点検・評価問題点	<p>博士の学位授与の基準に不明確な内容の基準、時代にそぐわない内容の基準、例えば博士課程後期課程修了後、何年後であっても再入学し、論文を提出すれば課程博士の申請ができるというように解釈できる規定が存在することは問題である。</p>					
改善方策	<p>3-158 文学研究科5専攻の学位授与方針と論文審査基準を制定し、『大学院の手引』に明示する。</p>					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
		→				
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
博士學位授与の基準に関する各専攻の内規の修正案を検討する。		2011. 2. 21	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 文学研究科と5専攻の学位授与方針と論文審査基準を制定した。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
『大学院の手引』に、学位授与方針ならびに論文審査基準を明記するための議論を開始する。一研究科のみでは実施できないので、研究科委員長会議または大学院改革検討委員会で議論する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 大学院改革検討委員会で議論した。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
平成25(2013)年度の『大学院の手引』から、学位授与方針ならびに論文審査基準を明記する。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 学位授与方針ならびに論文審査基準は作成したが、『大学院の手引』にはまだ掲載していない。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
作成した学位授与方針ならびに論文審査基準を『大学院の手引』に掲載し、配布する。			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】 具体的な学位授与方針ならびに学位論文審査基準が学生に明示されていないので、『大学院の手引』などに明示することが望まれる。</p> <p>【助言】 法務研究科以外の全研究科において、学生の受け入れ方針や入試データの『大学院案内』への掲載を含めて、受験生への広報が十分とはいえないので、改善が望まれる。</p>
点検・評価問題点	博士の学位授与の基準に不明確な内容の基準、時代にそぐわない内容の基準、例えば博士課程後期課程修了後、何年後であっても再入学し、論文を提出すれば課程博士の申請ができるというように解釈できる規定が存在することは問題である。
改善方策	3-158 文学研究科五専攻の学位授与方針と論文審査基準を制定し、『大学院の手引』に明示する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科ならびに5専攻の「学位授与方針」と「修士／博士論文審査基準」を制定し、研究科委員長会議ならびに大学院評議会に提出した。

所見

計画通り計画が実施されており、今後も期待する。

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科ならびに5専攻の「学位授与方針」と「修士／博士論文審査基準」を提出し、大学院改革検討委員会の議論に付した。制定された「学位授与方針」と「修士／博士論文審査基準」を論文提出要領とともに学生に配付した。

所見

計画通りに改善方策が実施されており、今後も期待します。

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

学位授与方針ならびに論文審査基準は作成したが、『大学院の手引』にはまだ掲載していない。

所見

来年度の『大学院の手引き』には掲載し、方策が進展することを期待します。

改善方策実施計画書

担当部局： 文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務局

2011年6月17日

認証評価指摘事項	<p>【総評】『大学院の手引』は、学則などの規程の転載に頼る部分が多く、構成・内容ともに工夫に乏しいので、学生への修了要件などの周知の観点から工夫が望まれる。</p> <p>【助言】法務研究科以外の全研究科において、学位授与方針ならびに学位論文審査基準が学生に明示されていないので、『大学院の手引き』などに明示することが望まれる。</p>					
点検・評価問題点	『大学院の手引』の掲載内容は、転載事項が多く、工夫に乏しい。					
改善方策	3-158-1（新規）『大学院の手引』を学生の視点に立った、魅力ある内容に改訂する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
未着手。			2011. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
『大学院の手引』をどのような形式・内容にするか、文学研究科委員会で掲載内容を検証し、立案する。ただし予算措置をとるため、研究科委員長会議または大学院改革検討委員会で議論する必要がある。			2012. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 文学研究科としての検証・立案は未着手である。 研究科委員長会議および大学院改革検討委員会でも議論していない。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
上記検証、立案を踏まえた、平成 25 (2013) 年度版『大学院の手引』の完成を目指す。			2013. 3. 31	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 学位授与方針ならびに学位論文審査基準は作成したが、『大学院の手引』に記載するまでには至っていない。		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
作成した学位授与方針ならびに学位論文審査基準を『大学院の手引』に記載する。				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】『大学院の手引』は、学則などの規程の転載に頼る部分が多く、構成・内容ともに工夫に乏しいので、学生への修了要件などの周知の観点から工夫が望まれる。</p> <p>【助言】法務研究科以外の全研究科において、学位授与方針ならびに学位論文審査基準が学生に明示されていないので、『大学院の手引き』などに明示することが望まれる。</p>
点検・評価問題点	『大学院の手引』の掲載内容は、転載事項が多く、工夫に乏しい。
改善方策	3-158-1（新規）『大学院の手引』を学生の視点に立った、魅力ある内容に改訂する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

『大学院の手引』の掲載内容は、転載事項が多く、工夫に乏しいことが、今回の認証評価の指摘で初めて明らかになった。2011年度以降の課題として、学生の視点に立った、魅力ある冊子体への改編にむけて、編集内容を立案する。まずは各研究科・各専攻で作成した「アドミッションポリシー」「学位授与方針」「学位論文審査基準」を記載すべきであろう。ただし学則との関係や予算措置をとるため、研究科委員長会議または大学院改革検討委員会で議論する必要がある。その際、『入試要項』『大学院案内』および『大学院文学研究科シラバス』などの冊子体も含めて、総合的、抜本的改訂を行うかも議論する必要がある。

所見	改善方策がさらに進展することを期待する。
----	----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科としての検証・立案は未着手である。研究科委員長会議および大学院改革検討委員会で議論していない。但し、『大学院入学試験要項』および『大学院案内』にアドミッションポリシーを掲載した。

所見	改善方策がさらに進展することを期待します。研究科の枠を超える問題でもあるので、研究科委員長会議・大学院改革検討委員会で積極的に議論してください。
----	--

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

学位授与方針ならびに学位論文審査基準は作成したが、『大学院の手引』に記載するまでには至っていない。

所見	来年度の『大学院の手引き』には掲載し、方策が進展することを期待します。
----	-------------------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2010年7月16日

認証評価指摘事項						
点検・評価問題点	教育研究上の必要性の判断、あるいは研究科委員会の認定を透明にし、いかに客観性を高めるか。					
改善方策	3-159 実務の経験を有する者に対する修了認定の客観性を確保する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
	→					
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
各専攻において、実務の経験を有する者に対する修了認定の客観性を確保するための根拠を検討する。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 未着手である。
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
昨年度未着手のためもう一度、各専攻において、実務の経験を有する者に対する修了認定の客観性を確保するための根拠を検討する。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由) 完全に達成
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
完全に達成済み			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	(B または C の理由)

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	
点検・評価問題点	教育研究上の必要性の判断、あるいは研究科委員会の認定を透明にし、いかに客観性を高めるか。
改善方策	3-159 実務の経験を有する者に対する修了認定の客観性を確保する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

全く未着手である。

所見	来年度からの改善が進展することを期待する。
----	-----------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

一研究科一専攻として議論できないので、大学院改革検討委員会の議論に付した。

2012年1月23日付「認証評価ワーキンググループ（答申）」の「認証評価改善報告に向けて 2. 大学院学則第15条4について」に「第15条4は削除し、第15条5を改正し、修業年限1年のコースを設置することで、入学段階から1年修業として対応する。」と記載した。これを受けて3月2日の文学研究科委員会に報告した。

所見	研究科としての取り組みがなされたことは評価できます。
----	----------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

完全に達成済み

所見	改善方策が達成されたこと、評価します。
----	---------------------

改善方策実施計画書

担当部局： 文学研究科 責任者：文学研究科委員長 幹事：大学院事務室

2011年6月17日

認証評価指摘事項	<p>【総評】大学院学則第15条4項において、修士課程または博士課程前期課程の早期修了者について実際に履修していないにもかかわらず2年次配当演習4単位を単位認定し、修了単位に算入していることについて、この制度による実際の修了者は過去1名のみであるものの、単位制度の趣旨に照らして問題があるため、改善が望まれる。</p> <p>【助言】大学院学則第15条4項において、修士課程または博士課程前期課程の早期修了者について実際に履修していないにもかかわらず2年次配当演習4単位を単位認定し、修了単位に算入していることについて、単位制度の趣旨に照らして問題があるため、改善が望まれる。</p>					
点検・評価問題点	文学研究科においては、指摘事項のような該当例はない。					
改善方策	3-159-1（新規）文学研究科では実際の修了者がいないものの、単位制度の趣旨に照らして問題があることを認識し、早急に学則改正を働きかける。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
未着手。		2011. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
研究科委員長会議または大学院改革検討委員会で、早急に学則改正を働きかける。		2012. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 大学院改革検討委員会で働きかけた。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
研究科委員長会議または大学院改革検討委員会で、学則改正を進める。		2013. 3. 31	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 大学院改革検討委員会にて検討し、学則改正に至ったため、完全に達成した。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	<p>【総評】大学院学則第15条4項において、修士課程または博士課程前期課程の早期修了者について実際に履修していないにもかかわらず2年次配当演習4単位を単位認定し、修了単位に算入していることについて、この制度による実際の修了者は過去1名のみであるものの、単位制度の趣旨に照らして問題があるため、改善が望まれる。</p> <p>【助言】大学院学則第15条4項において、修士課程または博士課程前期課程の早期修了者について実際に履修していないにもかかわらず2年次配当演習4単位を単位認定し、修了単位に算入していることについて、単位制度の趣旨に照らして問題があるため、改善が望まれる。</p>
点検・評価問題点	文学研究科においては、指摘事項のような該当例はない。
改善方策	3-159-1（新規）文学研究科では実際の修了者がいないものの、単位制度の趣旨に照らして問題があることを認識し、早急に学則改正を働きかける。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

文学研究科では今まで早期修了者の該当例がない。文学研究科には中国学専攻博士課程前期課程の「現職教員一年修了コース」と教育学専攻修士課程の「一年修了コース」があるが、この規定はそれではなく、優れた研究業績を修めたと認める者に対して修学年限を短縮する制度である。今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識したので、文学研究科では実際に修了者がいないものの、単位制度の趣旨に照らして問題があることを認識し、早期に学則を改正する必要があることを、研究科委員長会議または大学院改革検討委員会において働きかける。

所見	単位制度のあり方、カリキュラムの編成方針も合わせて検討されるべき問題と思われる。
----	--

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

大学院改革検討委員会の議論に付した。
日本文学専攻については、博士課程前期課程の現在のカリキュラム体系では、修学年限を短縮することは不可能に近い。博士課程後期課程では、カリキュラム編成を修正し、学則を改正すれば短縮することは可能であるので、今後検討してゆきたい。

所見	「一年修了コース」以外の一般学生が修業年限を短縮する場合の単位認定の方法を、今後議論していく必要があると思われます。
----	--

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

大学院改革検討委員会にて検討し、学則改正に至ったため、完全に達成した。

所見	改善方策が完全に達成されたこと、評価します。
----	------------------------